

氏名(本籍)	湯川洋司(神奈川県)				
学位の種類	博士(文学)				
学位記番号	博乙第839号				
学位授与年月日	平成5年2月28日				
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当				
審査研究科	歴史・人類学研究科				
学位論文題目	山村生活の変容と創造に関する民俗学的研究				
主査	筑波大学教授	文学博士	牛島	巖	
副査	筑波大学教授	文学博士	宮田	登	
副査	筑波大学助教授		高桑	守	
副査	筑波大学教授	文学博士	田中	圭一	
副査	筑波大学教授	理学博士	斉藤	功	

論文の要旨

本論文は、山村生活の変容の過程とその要因とを民俗変容の視点から動態的に論じ、さらに今後の山村像についても検討しているもので、序章、終章をふくめて8章からなる作品である。その視点は、山の多様な自然の規則性に適応しながら生きる暮らしの性格を「山村性」と表記し、山村の変容を、時代の進展に応じて、この「山村性」が喪失する過程に等しいと捉えることで、この二、三十年間に変容した山村の姿、山の論理から里の論理へ変貌した様相を詳細に考察し、さらに変容した山村の復権の論理を説いているものである。

序章では、「山人」から「山村」研究へと進展してきた山の民俗学の学史をたどりながら、山を生産活動の場とした人びとの生活文化の解明に移っていき、山村の特質や類型に関する研究が進展を見せたことを評価しながらも、これらの研究は変貌を遂げていく山村の動きを説明するには不十分であったし、現実の山村が抱える問題に応えることもできなかつた、と指摘し、動態論的研究視点を探る。

第一章「山の世界」は、山とは何か、その原像を提示している。焼畑農耕と、これに伴う儀礼から山の神信仰の様相の分析を通じて、山の自然に対して畏怖心をもちつつ適応しながら焼畑耕作を続けてきた姿、つまり山によって生かされる暮らしという原像を析出し、その暮らしの性格を「山村性」と表現してもよい、とする。

第二章から第四章は、現地調査により捉えた山の民俗変容の具体的報告で、本論文の中核部分をなす文章である。山村の民俗変容の諸相を、各々奥会津の小塩・布沢、五木村、椎葉村の4村の儀

礼と生業を詳細に検討し、その中で自然と人間の共生の論理が貫いていた「自律性のある村」の原像を抽出し、昭和三十年代を境にして変貌した山村の様相を追跡する。とくに多種の耕地に多様な作物を栽培する畑作優越型の農耕が、稲作の拡大化にともなう稲作中心型の農耕へ転換する動きに目をむけ、この動きの中で、山のさまざまな自然資源を「借りる」ことにより成立してきた暮しぶりが、山を重視せずに耕地を「所有し管理する」ことにより生きる方向に転換したと指摘している。さらに山村は、その「所有し管理する」という里の思考に同化吸収されるような異質な変容を遂げたと捉える。

第五章では、この「所有・管理」という里の思考の産物が山村の人びとの意識をも変容させてしまった点を、山民的自然観と農民的自然観を対比しながら検討し、山村生活の変容は、まさに山と里との間に結ばれてきた関係が均等を失い、里偏重になったものと見る。だとすると、変容した山村の復権は、山村生活の原理を見直し、山と里のバランスがとれた社会を再構築することにあると力説する。

第六章では、四国山地西部の野村町惣川地区におけるむらおこし運動の具体的検討がなされている。このむらおこし運動の試みは、山村性の復活と、他地域との積極的な交流をめざしている点で評価されるもので、山村の自律性を損なうまいとする基本姿勢は誤っていないと見てよいだろう。

終章「新たな山村創造の道」では、これまでの課題を整理し、過疎化、自律的山村像の基本構造、山村の再生と創造についてあらためて検討している。里から負の評価しか与えられなくなった山の生活ではあるが、「なかば病んでいる」現状の日本の将来像を見据える作業に即して見れば、自然に適應して生きる暮しの原理である「山村性」の現代社会における復権を図る試みは重大な課題であると結んでいる。

審 査 の 要 旨

本論文は、従来の民俗学的研究が山村と山の民俗文化として限られた空間内で完結して捉えようとするのに対して、山と里の交流、山村の変容と日常生活文化の具体像を実地調査によって再編成しようとしており、視点としては、社会変動の余波をうけて伝統的民俗文化がどの様に変化し、新たに展開するかという現代的課題への取り組みがある。そうした現地調査にもとづく積極的姿勢は評価できる。

また、山の神の存在する「山」を「畏怖されるべき超自然的存在が棲む世界」とし、そこに「山と適合的に暮らす」人々の自然認識を探ろうとする視座、つまり、これまで景観及び空間、生業形態などの視点だけでは把握できかねた山村を、「山」の世界観として捉えかえたところが本論文の意味を高めているといえよう。そして、山村の変貌を、山の思考に対する里の思考に、そして農民的自然観に浸食され、吸収されていく過程ととらえる論旨はきわめて説得力があり、共感ももてるものといえよう。

しかし、全体構成の核として、山村民俗文化の象徴に「焼畑と山の神」があげられ、このモデル

を析出したフィールドが東日本であるのに対して、山村のダイナミズムを検証するフィールドは五木と椎葉という九州に片寄っている。できるならば中部日本の山村地域をあげられるとっそう総覧できたと思われる。

さらにむらおこし運動や地域づくりの運動をとりあつかった「新たなる山村創造」に関わる部分は、やや分析が表面的記述に流れているとの印象がある。これは民俗学には珍しい現代的メッセージを持ったもので、山村の現実を前にした研究者の焦燥と重なり合うところでもあり、研究の枠からはみ出して、実践的な地域づくりの運動に関与している研究者の主体性をうかがわせるものではあるが、なお評価の分かれる局面であろう。

とはいうものの、山村生活の変容の過程とその要因とを民俗変容の視点から動態的に論じ、さらに今後の山村像についても検討しているものとして、高く評価することができるものである。

よって著者は（文学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。